

群馬詩人クラブ

会報

No. 292

編集／群馬詩人クラブ幹事会

代表／平野秀哉

発行／群馬詩人クラブ事務局

〒370-3102

高崎市箕郷町生原1730

龍昌寺

印刷 三協印刷

振替番号 00140-8-728969 狩野務

主な記事

- 詩集評…………… 2
大塚史朗詩集「野道で」 平野秀哉
- イベント報告……………2~7
第14回あすなる忌 関口将夫
第18回薔薇忌 磯貝優子
詩人久保田稔さんを甦らせる会 宮前利保子
まほろばポエトリーステージ 野沢啓講演会 野口直紀
第43回朔太郎忌 齊藤守弘
高崎現代詩の会 現代詩ゼミ 原田 鰐
前橋・ポエトリーフェスティバル2015 新井隆人
- 年刊詩集第38集 原稿募集 …… 8
- 受贈詩誌御礼／編集後記 …… 8

どこまで飛ばす？ことばの飛距離

房内はるみ

母
あ、麗うるはしい距離デステン、
つねに遠とほのいてゆく風景……

吉田 一穂

悲かなしみの彼方かた、母への、
搜さがり打うつ夜半ビアンシモの最弱音。

天気

西脇順三郎

(覆くつがえされた宝石) のような朝
何人か戸口にて誰かとささやく
それは神の生誕の日

この二つの詩を読んだ時、私は胸の中に

すーっと冷たく清らかな水が流れていくような感動を覚えた。詩の性格から言えばモダンズムに属すると思うけれども、何々ニズムという言葉で括るのは、あまり好きではない。ただ詩作品そのものを味わいたい。

まず吉田一穂の「母」から見てみよう。この詩は遠く離れた母を想う詩である。ひとり淋しい夜、母への想いはビアンシモのように静かに流れていく。と言う意味だろうか。でもそんな説明はいらない。ただこの美しい四行の詩を心地よい音楽を聴くような気持ちで酔いしれればよいと思う。詩とは説明ではない。それはことばの「ひびき」であり、「ひ

かり」のようなものが大切であると思う。

次に西脇順三郎の「天気」。この詩には天気という言葉は出てこないで、突然「覆された宝石」のような朝が出てくる。それがどのような朝であるのかなどという考えもいらないだろう。このことばが発するイメージを感受すればよいのだと思う。

私のところにもシュールな詩が時おり届く。そのことばの飛躍についていけないものもある。私の貧困な頭ではついていけない詩もある。ことばをどこまで飛躍させイメージを膨らませるかというのはなかなか難しい。やはり中心となる信念みたいなものが必要だろう。ところで、詩とはたたくさんの体験、あらゆる経験とが、時間という濾過器を通して、心の底から沸き上がってくる感情を「待つ」ものではないかと思う。松尾芭蕉の「奥の細道」も東北地方を旅して数年後に書かれている。ことばとして熟するのに、それだけの時間が必要だったのだろう。前述の「母」や「天気」も長い間の母への想い、自然への想いがある。時このような作品を「書かせた」のだと思う。まどみちおさんも「ハッ」とした時にメモをしておいて、何をハッとしたのか、それを追及します」と言っている。

詩とは心を澄まして「待つ」ものであり、詩人とは「待つ」ことによって溢れ出た感情を「書かされている」ものではないかと思う。

詩集評

詩集『野道で』を読んで

平野秀哉

大塚史朗さんから『野道で』という詩集が送られてきました。集中「自死について」にこんな行がありました。

八十年近い生涯を回顧する

いつも労働のくり返しの歲月だったが
食べたいだけ食べ 飲みたいだけ飲み
書きたいだけの詩を書きなぐり

その多くを紙に残し

お人良し典型の健康な女とくらし

頭を悩まされたことのない娘たちも嫁ぎ

孫もつがなく大きくなり

「いっお迎えがきてもいいんだ」とうそぶ
き

女房どのおびやかして

後生楽を堪能している日々だが

つとめて書齋にこもっているのは

まだまだこの世に

言いたいこと 残したいことが

あるからだろう

八十年近い生涯——とあるが私とほぼ同じ年代だから共通する思い出があつてなつかしかった。

ネカサ泳ぎ——仰向けになって目と口と鼻だけ出して手足を動かさないうで流れを下る。何もしないで終点まで流れつくのだ。私たち

もやったことがある。利根川の清冽な流れの中で川の音をききながら。

フルヤのモリ——古屋の漏り 茅ぶき屋根

の家が古くなって雨漏りがする

我がムラも江戸から佐渡に行き来した金山

街道

上州の宿場町だった

本陣があつた 宿屋があつた 二分金屋

とうふ屋 こんにやく屋 餅屋 女郎屋も

あつたのだ

一九六〇年代まで 覚えていられるだけで茅ぶ

き屋根の家が 十五軒

十五年も大きな戦争が続いたので 食糧増

産が国策

カヤ場という所はすべて芋畑かおかほ畑に

なり

茅ぶき屋根の家はこの世から消えた

消えてしまったのは茅ぶき屋根だけではな

い。

男女に近隣も寄り合つて生きて来た長年の

習わしが

壊れてしまったのは

どうしてだろう (ひと)

作者は永い眼・優しい目で人生を見つめています。そして詩を生み出しています。

十九冊目になる『野道で』は

まさに 時代という大河に流れ流されて

行った人々に思いをはせながら(あとがき)

書かれた作品群です。

イベント報告

第十四回「あすなる忌」

関口将夫

映画「ここに泉あり」を観て、「郷土を美しい詩と音楽で埋めましょう」を心に、崔華國氏が「あすなる」を開店したのが五十八年前。そして崔華國が生まれて百年と言う歳月が過ぎようとしている。今年八月には「詩と思想」で崔華國生誕百年の特集も組まれるようです。

「あすなる」が開店したのが三十一年も前だったが同じ場所、同じ店で新たに開店した「あすなる」で第十四回「あすなる忌」が開催された。約60名の参加者が集い、講演と詩朗読が行われた。今回の講師は、高崎市民新聞取締役と編集主幹を三十年やっていた小見勝栄氏を招いた。氏は高崎市教育委員会の教育長も務め、現在「あすなる学園児童クラブ」園長でもあり、著書に小説「憂鬱な休暇」「沼賀健次伝」等がある。講演は「あすなる本町時代と高崎の群像」と言うテーマで話が進められた。

氏が経済大学生の頃、文芸部で出版していた「三扇文学」の会合や、校正等も「あすなる」に集い行われ、ほぼ毎日のように「あすなる」に出入りしていた様子や、学生達の活動の場であり、学生達の文化の拠点的位置にあったことなど生き生きと話をしてくれた。

そして地域における文化活動の重要性と、今後どのように展開をしながら、文化の場を維持して行かなければならないかを、熱く語ってくれた。そして「あすなる」が閉店して三十一年の歳月が流れて、消えたはずの「あすなる」が、まるで「ここに泉あり」の泉のように一筋の光と共に湧き出したのではないかと思われると結んでいる。氏が児童クラブを開園する時、迷わず「あすなる学園」と名付けたことでも、氏が若き頃より「あすなる」に通い深く心に残っていたことが伺える。

最後に学生当時一緒に「三扇文学」で活動していた、詩人の渡辺慧介氏が「あすなる」をテーマに書き下ろしの詩を、塚越美月さんのピアノ演奏と共に朗読してくれた。

コーヒータイムの後、李美子さんによる韓国語の詩朗読。井上敬二氏のギター弾き語り、崔作品の「鯛」と自作詩の「最後の女」を朗読してくれた。中林三恵さんの流暢な韓国語と日本語の詩朗読。最後に黒川初美さんと私で崔華國の詩を構成した詩の朗読をした。参加者の中から、川島完・中村不二夫・原田道子さん達から貴重なスピーチをいただき閉会した。

「あすなる忌」は、ただ単に崔華國の作品を顕彰するだけでなく、同時に文化の「場」とはなにか、崔華國が為していた人と文化の交流、そして地域における「文化の磁場」とはなにか、それらも同じ視点で考えているのだと思っている。

第十八回薔薇忌

美しい歌声に包まれて

大手拓次をしのぶ

磯貝優子

四月二十九日、昭和の日に例年のように、薔薇忌が磯部の地で開催された。

見事な花々で飾られた墓地には、多くの方が集まり、詩の朗読、献花により墓前祭が行われた。

その後、今年初めて設けられた大手拓次賞の授賞式が温泉会館において始められた。

群馬大学の西田直嗣先生の地域貢献事業により実施された第一回大手拓次賞は、佳作三点が選ばれた。そのうちの「薔薇の水脈」という詩を作った藤岡市の山口和士さんが出席されて表彰された。他の二点は付曲賞、安中市長賞に輝いた。今年は一六八点の応募があり、審査にあたったが、審査員が一致して推せる作品がなく、今後を期待して佳作三点を選んだとの選評があった。

続いての講演会では、「まぼろしに咲く薔薇の歌」と題して、西田先生が、拓次の詩と作曲に関わることを、ソプラノ歌手の佐藤貴子さんの歌声にのせて話された。

「まぼろし」とは何か。自分の人生はまぼろしのようなもの、人生すべてはまぼろしととらえられる。ただ人の記憶には残るので、どのような花をそこに咲かせるのが、今は

自分のテーマだという。

具体的には、作曲した数々の曲を取り上げながら、拓次の詩の魅力について説明された。拓次は薔薇と向き合うとか対立するとかではなく、「わたしの薔薇」として詩語を発する。まぼろしと定義づけるのは、まぼろしと化してしまえば自分のそばに寄り添わせることができるからで、共感できる。拓次の詩の魅力は、想像しなければ味わうことのできない世界をもつということで、気づいたことや考えたことを伝えるのではなく、詩によって想いを呼び起こさせるものが、まさにそれであると述べられていた。

これまでに作曲された詩は数が多かったが、「ばらのあしおと」、「夜の薔薇」、「終なき薔薇」の詩に表われている拓次の深い想いや豊かな想像力、印象的な言い回しや激しい詩語など拓次の独自の世界を説明された。曲として聴くと、繰り返しの言葉や終わりの余韻など拓次の詩がすつと消えてゆく部分において、呼応する詩語と音を楽しむことができたし、寂寞とした空気を感じもした。

講演後、「まぼろしの薔薇Ⅰ・Ⅶ」「明日を待つ薔薇」が会員の朗読と共に地元の合唱団により演奏された。美しい歌声が響き、これまでになく盛大なことと思われた。昨年のように磯部小学校の児童、高校生による朗読もあり、約九十名の参加を得たが、世代を超えて、大手拓次を称える時間を共有できたことは大きな前進であったと考えられる。

「詩人 久保田穰さん」 魁らせる会」に出席して

宮前利保子

久保田穰さんは去る十二月二十一日逝去された。優れた詩人であり教育者だった人は、もうこの世にいない。亡くなって二ヵ月余

「久保田さんを魁らせる会への招待」の通知が届いた。茫茫の中で呼吸を整えながら綴った筆跡が浮かび強い違和感を覚えた。久保田さんは漸く苦しみから解き放たれたのに又苦渋の渦中へ。私は悶悶と数日過しその夜発起人の方へ電話を入れ心意を語る。胸中には苦しめぬいた久保田さんの表情しか浮かばない。青年会館会場へ十分前到着。多勢の人が集まる会場に入る。先づ受付をすませ席を探す。最前列の空席に腰を降ろすと「朗読五分前スタンバイして下さい。」の声。壇上でマイク調節。やがて一分前の声。最初は私の朗読。詩作品「サン・ジュアンの木」―香月泰男に―

を読む。作品は第35回壺井繁治賞を受賞した詩集名の作品だ。シペリヤから持ち帰った豆の木の小きな粒、蒔いたら発芽、十年経ち花が咲いた。香月は花の木になろうとしたがなれず、香月の描いた絵の中で小さな豆粒が漆黒の空にきらりと光っている。の詩だ。三人の朗読終了。

後半は久保田穰作詞・丸山亜季作曲で組曲

「スーホの白い馬」全九曲である。この日のためにレッスンを重ねた音楽教育の会の人々五〇余人が壇上に立ち並び、保育士さんたち若者が埋めつくす。ピアノの音が会場に響き渡り一斉に歌い出す。力強い響き透き通る声。洗練された音楽教育の会員の混声の美しさが胸を突く。聞き入る人々をモンゴルの草原へと誘い駆け抜けていく。感動に包まれる。

第二部シンポジウムは「久保田穰さんが遺したものの、私たちが受け継ぐもの」では四人のパネラーに続くフロアーからの一〇人の発言。次々の発言を聞きながら私の心は動揺「発言すべきか否か。」立派な人柄故そうなる事は解っているが綺麗事で終わりにたくない。発言は続いていく。「俺は真実を求め真実を語り生きて来た。宮前は真実を語らないのか。」後方から久保田さんの声。私は突き動かされ手を上げた。「発言すると此所に居られなくなりそうで」と私は話し出すと気持ちよく楽になり「発起人の肩書の友人」として発言した。

出逢いは群馬民主教育研究会。私の分科会は児童文学。常に助言者は木村次郎氏だった。分科会が終わると久保田さんは私の部屋へ来て木村次郎氏と詩論をはじめ。退職後は児童文学創作教室へ四年間東京へ通う。詩も書き始める。童話出版で煥乎堂の岡田さんを久保田さんが紹介出版となる。翌年群馬児童文学賞を受賞。詩集出版では朶を書いて貰い、

四集までの詩作品選出を依頼した。梅の好きな久保田さんは完熟梅干しを喜んで食べた。

四月二十四日何うと「力が入らなくて字が書けないんだよ。」と。文字は一字一字丁寧に書く人、原稿用紙の文字は5日の鉛筆で書いたように薄い。辛かろう思いを抱いて、帰途へ。七月十六日入院。一三日程遅れ葉書きが届く。

肺気腫の肺は網の目の様になり酸素を吸っても留まる所が無い、本当に苦しい病なので。と聞いていた私は苦渋に満ちた久保田さんに、心から安らかに眠って下さいと言いたいのだ。と終わる。私の言葉を受け取り「私の園の子どもたちは身を乗り出しスーホを歌います。歌い終わってスーホは魁つたよと言います。」と語ってくれた高橋さんに感謝。

※発起人松本美津枝さんルポを参考。

『久保田穰詩選』5000円

『昭和の子ども』

久保田穰の間わずがたり』5000円

『ちよぼくれ71号』10000円

『夜明け185号』3000円

申し込みはまとめて

0276・74・1219

松本美津枝宛

基金は新盆の供物として

久保田家に届けます。

第29回まほろばポエトリーステージ

野沢啓講演会

「いま、この時代に詩を書く
ということ」に出席して

野口直紀

五月三日(日曜日)

初夏。新緑の眩しい季節。

爽やかな風に吹かれて、今日は気軽にのんびりと講演を楽ししく聞くつもりでいた。

ところが野沢氏の講演は難しく、おまけに講演の感想を書かねばならない事になってしまい、気軽に楽しむどころではなくなってしまう。

私は海外の詩人、作家、思想家、音楽家等々、まったくわからないのだ。

今回も、ジャック・デリダ。パウル・ツェラン。フィリップ・ラクーーラバルト等々を野沢氏は取上げた。

私にはまったく歯がたたなかつた。鮎川信夫については長く語った。

後日、こうして改めて鮎川信夫の作品を読んでみると、さすがに素晴らしく感銘した。詩ばかりか散文も強いものを感じた。きわめて鋭い。

「荒地」のリーダー格。

「戦後詩」を引っぱってきた詩人の一人と言えよう。

吉本隆明はどうなのだろうという疑問が残った。対談の数も多いし取り上げてしかる

べきと私は思った。

野沢氏は何か深い理由あって敢えて取り上げなかったのかもしれない。

二次会にも出た。

大橋政人氏がいつものように元気であった。問題発言を三つ、四つと。

さすがと思わせる内容のものであった。

☆

野沢啓氏は未来社と言う出版社を経営されている。親の跡を継いだのだ。

埴谷雄高のエッセイ、対談集などを刊行している。ほとんどと言っていいのではないかと私も八割くらいは持っている。

埴谷雄高のエピソードなどを今日の日に、話してくだされば、より会はもりあがったのではないかなどと思った。



第四三回朔太郎忌

「いまこそ、朔太郎」の開催

— 言語の資質を問う —

斉藤守弘

二〇一五年五月十日(日)、前橋市民文化会館にて、第四三回朔太郎忌「いまこそ、朔太郎」が開催された。主催は萩原朔太郎研究会/水と緑と詩のまち前橋文学館による。開催に先立ち、前橋コンベンション協会理事長、前橋市長、同教育長、市議会議長、そして遺族の萩原朔美氏の紹介と挨拶が行われた。

萩原朔太郎研究会会長の三浦雅士氏による開催の辞では主に、朔太郎が日本に初めて近代詩をもたらせたこと、ふれ、前橋市としてもその存在の郷土の誇りを強くうちだすことが望ましいこと。さらに、市と市民が近代詩の歴史と文学を強く結びつけることが世界的にも重要ではないか。詩を書きはじめる人にとつてもその文学観は重要であろう、と述べられた。

つづいて群馬県立前橋高校ギター・マンドリンクラブの演奏、前橋文学館友の会の合唱、そして詩作品の朗読。前橋在住の関根美紅さん、来実さん姉妹による詩「こころ」、東京都在住の山野瞳さんの詩「およぐひと」が行われた。

講演は詩人、蜂飼耳氏による「朔太郎の詩と情熱」の題で話をなされた。

講演の内容はまず、前橋駅周辺にみるよう

に朔太郎のアピールは地味であるが、朔太郎の詩作品は郷土、ふるさとを大事にした印象が強い、この対比のこと。詩への情熱が強いあまりピアホールに原稿を持ち入り紛失してしまったこと。室生犀星との繋がり。島崎藤村、山村暮鳥、『詩の原理』などのことを通

してみると、朔太郎は自分の立場と趣の違った文学者を丁寧にとりあげた。それは詩の読み方の楽しさを語ることであり、と話された。

対話・谷川俊太郎／三浦雅士（聞き手）による「いまこそ、朔太郎」での話題は闊達な気風の中で、両氏の詩論の応酬であったが、内容は個々の主題に分けて整理されておられた。萩原朔太郎と谷川俊太郎との詩の共通点について。口語詩の開発、知性と無意識のこと、言語で語れない部分と言葉を越える領域、言語以前の世界の危うさや輝きと存在、さらに意味について、宇宙の無の意味と言葉などについて言及し、朔太郎の詩人的人格は感情を超越した詩の探求にあったことを述べられた。

今回の朔太郎忌は、「いまこそ、」の標題が参加者各位の頭中に降り注ぐものとなった。もとよりその題は行政の部分とは別に、各位それぞれの内面のテーマであり、教ええかつ教えられるものではないと思う。けれども、蜂飼氏が『月に吠える』の中の詩「くさった蛤」の初印象の気味の悪さから、のちに言語美を見出したと語り、また谷川氏が言葉あつてこそ「宇宙」の意味が生ずると語ったように、いまこそ、は言語の触手の資質を自らに問うという教示は存在したのではないだろうか。

高崎現代詩の会 現代詩ゼミ

講師 真下宏子さん 四月十九日(日)

「大手拓次の人と作品」

原田 鯉

高崎現代詩の会では、新年度総会終了後、恒例の現代詩ゼミを開催しました。今年も安中市の大手拓次研究会代表の真下宏子さんに拓次についてお話を伺いました。

真下さんはもともと前橋の出身ですが、嫁いで安中市民となり、後に、郷土の詩人である大手拓次に興味を引かれ、以来、郷土の文化遺産として彼とその作品の研究に傾倒して来られました。研究会は安中を拠点としてすでに十六年にわたる活動の歴史があります。日本の象徴詩の楚としての拓次とその作品の真の魅力をもっと知ってもらい、さらに現代詩における拓次の功績と作品の価値を改めて評価することに貢献して来ました。

日本の象徴詩人の少年時代は、やはり、臆病でわがまま、内向的なものでした。そこに、己の過剰な繊細さに手を焼く非凡な才能の少年の姿が見えます。拓次は磯部の温泉旅館で成功した一族の、経済的には恵まれた家庭で育ちましたが、一方で家庭環境は、少年時代の早い父母との死別、その後、その寂しさの中で祖父父母の愛を一身に受けて暮らすというものでした。愛情の複雑な交錯とその内向的資質が拓次の鋭敏な感性と才能をさらに磨き上げてゆくことになったようです。当初は自

然主義の影響を受けていましたが、その後のフランス象徴詩への傾倒は早稲田大学在学中のころから始まり、ボードレールなどの訳詩に没頭したり、「藍色の墓」などの象徴詩を試みるようになりました。

拓次は生涯で約二千四百編の詩を残し一九三四年（昭和九年）四十六歳でこの世を去りました。真下さんが今回テキストとして用意してくださいました「藍色の墓」などの作品を改めて読むと、その時代の中でもひときわ個性あふれる斬新な表現を感じとることができました。それは自然に、「大手拓次はなぜもともと日本の詩壇の表に出て来なかったのか？」という素朴な疑問に行き着くのです。北原白秋の主要な門下生の一人であり、朔太郎・犀星らの一流の詩人からも強い関心を寄せられながら。さらに、二千四百編もの詩を残しながら、生前には一冊の詩集をも刊行しなかった、それはなぜ？

当然ながら最後は受講者の興味もそこに集まりました。でも、それはいろいろ解釈が成り立つでしょうが、真下さんによれば、「しよせん推測の域を出ないのです。」

最後にまったくの余談です。

薔薇ノ木ニ 薔薇ノ花咲ク ナニゴトノ不思議ナケレド

私はこれが「薔薇の詩人」拓次の作と数年間信じていました。北原白秋だったのですね。改めて注意深く読むと、やっぱり拓次とは異質の感性を感じられるようです。

前橋ポエトリーフェスティバル2015レポート 「詩を開き、詩でつながる」

新井隆人

昨年引き続き第二回目となる前橋ポエトリー・フェスティバル(以下「ポエフェス」という。)を、無事実施することができた。何事も初回は注目を集め、興味も引く。二回目こそ本領が試される。そんなプレッシャーを感じていたが、多くの仲間や賛同者に恵まれたお陰で、最終的には、前橋市内の十四会場において、約百二十名の出展者・出演者により、三二の展示・イベントを開催することができた。東京で三月に開催したブレイベントも含めれば、出展者・出演者は百五十名近くになる。規模としては昨年の倍以上となった。

個々の展示やイベントに触れることは無理なので、三つほどポイントを絞って述べる。一つ目は、東京の詩人たちにポエフェスを認知してもらうべく、東京でイベントを開催したこと。三月一日に荻窪のブックカフェ6次元を会場に「前橋ポエトリー・フェスティバル in 東京」と題して、トークイベントと詩の朗読会を行った。告知はネットと口コミだったのだが、約三十名の参加者を得て、満員御礼となり、東京の詩人たちの前橋への熱い思いを知ることができた。トークイベントでは、地方における詩の現状(詩人団体の高齢化と先細り、世代間の断絶)、地方での詩

のイベントの意義やあり方が語られ、参考になる意見を多く戴けた。朗読会では、多彩なスタイルの東京の朗読シーンを垣間見ることができた。6次元のイベントの前には「お散歩写真・お散歩ことばワークショップ in 荻窪」を実施し、ここで作られた作品は、ポエフェスの期間中に荻窪堂で展示した。

二つ目は、「詩でつながれるか」という試みについて。今年のマエバシ詩学校のテーマは「詩を開く」だったのだが、ぼくが十数年間詩人として活動した中で感じていたのが、「詩が閉じている」「詩人が閉じている」といった閉塞性だった。理由は、同人や詩人団体という枠組みの中で、詩人たちが活動していることが大きいように思う。ポエフェスの一貫である煥乎堂での「現代詩手帖・現代詩文庫フェア」で、六十年代後半から七十年代の現代詩手帖のバックナンバーを入手したのだが、その誌面からは、詩がアートや演劇、音楽などと非常に密接に連動していたことが窺える。ポエフェスが目指しているのも、詩を、さまざまなクリエイターとつなげ、さらにその先の観客につないでいくことだ。もちろん、詩人同士をつなぐ場であることも言うまでもない。二三日のマエバシ詩学校とポエトリー・リーディングの参加者について言えば、県内や東京ばかりでなく、宮城や愛知、埼玉、栃木、神奈川など、国内各地から詩人が訪れてくれた。同日夜のレセプションでは、四十人以上のクリエイターが集い、懇親を深めた。とあ

る県外の若手詩人は、ポエフェスのおかげで友達が三十人増えたそうだが、ポエフェスが、詩を開き、詩でつながることを実現できたエピソードとして、嬉しく受け止めている。

三つ目は、社会情勢に合わせて詩のあり方が変化していることに敏感であること。若者の雇用・所得状況が厳しくなっている中、現在当たり前のように定着している、高い詩集発行費、同人参加費を払い、できあがった詩集や詩誌を、詩人同士が無料で寄贈し合うという、贅沢で閉じた関係性は、どこか不健全で不純なものになっていないだろうか。若い詩人たちは、金銭の授受をして詩集や詩誌をやりとりしていることが多い。その清廉さに、ぼくは詩の未来を感じる。余談だが、先だって、生前関係の深かった、亡くなった若手詩人の遺稿集を購入したのだが、寄贈されている詩人もいることを知って、残念に思った。寄贈と販売の判断は、遺族によるものなら構わないが、今回のケースは遺族が判断できるとは思えない。誰かが勝手に判断したのだとしたら、それは越権行為であるし、なにより不純だ。本人が発行した詩集について本人が寄贈と販売の判断をすることには異論はないが、遺稿集はそのあたりの判断が難しいから販売しないことが多いのだと思う。詩の世界の不健全性の事例として、掲げておく。

詩を届けるには、まずは、人とつながらなければならぬ。人とつながる場であること。ポエフェスの一番の意義は、そこにある。

年刊詩集第三十八集

原稿募集

締切日 七月三十一日(木) 必着

参加費 会員 5000円
会員外 5500円

*但し、二頁を超える作品は、いずれの場合も一頁あたり2000円の追加となります。

形式 見開き二頁(40字×40行)を基本

とし、最初の五行は表題・作者名・行数オーバーの場合追加料金となりますのでご注意ください。

発行 十一月発行

配布 平成二七年度総会にて(2部)

*当日欠席で郵送を希望する方は、参加費に送料5000円を加算して振り込んでください。

参加費振込先 郵便振替で左記へ。

口座番号 00110101485932
口座名義 篠木登志枝

*振り込み手数料は自己負担となります。

*年刊詩集分〇〇円・郵送料500円と明記のこと。

振込期限 十一月十日まで

原稿送付先 郵送・FAX・メールで開始中

郵送 〒377-0201 洪川市上白井二三三四一
須田芳枝宛

FAX 0279(53)5718
メール taku_wan_1@yahoo.co.jp

*原稿はコピーしておいてくださると助かります。

受贈誌誌御礼

*御惠贈感謝いたします。

宮城県詩人会会報20

秋田県現代詩人協会会報51

北海道詩人協会会報138

長野県詩人協会会報128・129

兵庫県現代詩協会会報36

兵庫県現代詩協会会報特別号

「阪神・淡路大震災から20年を想う」

秋田県現代詩年鑑2015 秋田県現代詩人協会

静岡県詩集2014 第24集 静岡県詩人会

中日詩人集54 中日詩人会

中四国詩集2014 中四国詩人会

島根年刊詩集第四十三集 島根県詩人連合

GIFU詩人集2

福井県詩人懇話会会報88

茨城県詩人協会会報20

いちご通信(大分県詩人連盟会報11)

島根県詩人連合会会報78

大分県詩人協会会報142

皿 岩手県詩人クラブ会報88

中四国詩人会ニューズレター37

福岡県詩人会会報161

横浜詩人会通信294

詩界262

詩界通信70

季刊詩的現代12

紫翠30

裳125

流42

燎5

幻竜21

榛名団14

宇宙8

裸心版

個人詩紙

清水正吾

富沢 智

真下宏子

こまつかん

城田博己

生きる1:2:3:4:5 (五月二十日現在 敬称略)

◆◆◆ 編集後記 ◆◆◆

「五月の風をゼリーにして食べたい」。

ある天折詩人の言葉と記憶しています。五月はまことにさわやかで、すがすがしい。好きな季節だ。今年は、まるまるひとつきたっぷり

と五月の風のなかにいたように思います。ばらや芍薬や牡丹の花々がうすみどりの初夏の風にそよぐのを眼にながら、この風をどのように

に食するのがよいのか、考えてみたりももちろん答えはありませんが、そうしたたわいな

いなひとときが、鬱屈としたところを自在な世界に解き放つてくれるのでした。

さて、前号でお知らせした四月、五月に開催された詩の関係イベント「あすなる忌」薔薇忌「朔太郎忌」「久保田穰さんを甦らせる会」「まほろばポエトリステージ」には多

忙のなかではあったが、なんとか出席することができました。いずれの催しも企画運営にたずさわった関係者のみなさまのご苦労に敬意を表したいと思います。まことにご苦労さまでございました。

ことしは、本会役員のご改選の年であり、同封ハガキにて、ご投票よろしくお願いたします。

(三枝 治)